論語

電子書籍 体験版

論語

学而第一

目次　　電子書籍操作ガイド

學而第一　漢文目次

學而時習之 1
其爲人也孝弟 2
巧言令色鮮矣仁 3
吾日三省吾身 4
道千乘之國 5
弟子入則孝 6
賢賢易色 7
君子不重則不威 8
愼終追遠 9
夫子至於是邦也 10
父在觀其志 11
禮之用和爲貴 12
信近於義 13
君子食無求飽 14
貧而無諂 15
不患人之不己知 16

學而第一　書き下し文目次

学びて時にこれを習う 1
その人と為りや孝弟にして 2
巧言令色には鮮し仁 3
吾日に三たび吾が身を省みる 4
千乘の国を道むるに 5
弟子入る則ち孝し 6
賢を賢として色に易え 7
君子は重からざれば則ち威 8
終りを慎しみ遠きを追えば 9
夫子はこの邦に至るや 10
父在せばその志を観る 11
礼はこれ和を用て貴しとなす 12
信義に近づけば 13
君子は食飽くを求むること 14
貧にして諂うなく 15
人の己を知らざるを患えず 16

会社情報・コピーライト表示

子曰、學而時習之、不亦説乎。
有朋自遠方來、不亦樂乎。
人不知而不慍、不亦君子乎。

有子曰、其爲人也孝弟、而好犯上者鮮矣。不好犯上、而好作亂者、未之有也。君子務本。本立而道生。孝弟也者、其爲仁之本與。

子曰、巧言令色、鮮矣仁。

曾子曰、吾日三省吾身。爲人謀而不忠乎、與朋友交而不信乎、傳不習乎。

子曰、道千乘之國、敬事而信、節用而愛人、使民以時。

子曰、弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛衆而親仁、行有餘力、則以學文。

子夏曰、賢賢易色、事父母能竭其力、事君能致其身、與朋友交、言而有信、雖曰未學、吾必謂之學矣。

子曰、君子不重則不威。學則不固。主忠信、無友不如己者。過則勿憚改。

曾子曰、愼終追遠、民德歸厚矣。

子禽問於子貢曰、夫子至於是邦也、必聞其政。求之與。抑與之與。子貢曰、夫子温良恭儉讓、以得之。夫子之求之也、其諸異乎人之求之與。

子曰、父在、觀其志。父沒、
觀其行。三年無改於父之道、
可謂孝矣。

有子曰、禮之用和爲貴。先王之道斯爲美。小大由之。有所不行。知和而和、不以禮節之、亦不可行也。

有子曰、信近於義、言可復也。恭近於禮、遠恥辱也。因不失其親、亦可宗也。

子曰、君子食無求飽、居無求安。敏於事、而愼於言、就有道而正焉。可謂好學也已。

子貢曰、貧而無諂、富而無驕如何。子曰、可也。未若貧而樂、富而好禮者也。子貢曰、詩云、如切如磋、如琢如磨。其斯之謂與。子曰、賜也、始可與言詩已矣。告諸往而知來者。

表示

前頁

次頁

子曰、不患人之不己知、
患不知人也。

子曰、學而時習之、不亦説乎。

子曰く、学びて時にこれを習う、また説ばしからずや。

有朋自遠方來、不亦樂乎。

朋あり、遠方より来たる、また楽しからずや。

人不知而不慍、不亦君子乎。

人知らずして慍らず、また君子ならずや。

有子曰く、

有子曰、其爲人也孝弟、而好犯上者鮮矣。不好犯上、而好作亂者、未之有也。君子務本。本立而道生。孝弟也者、其爲仁之本與。

その人と為りや孝弟にして、上を犯すことを好まずして、乱を作すことを好む者は鮮し。

上を犯すこと

上を犯すことを好まずして、乱を作すことを好む者は、

未だこれあらざるなり。

君子は本を務む。

孝弟なる者は、本立ちて道生ず。

それ仁の本なるか。

子曰く、
子曰、
巧言令色、
巧言令色、
鮮し仁。
鮮矣仁。

曾子曰く、
曾子曰、吾日三省吾身。爲人謀而不忠乎、與朋友交而不信乎、傳不習乎。

吾日に三たび吾が身を省みる。
人のために謀りて忠ならざるか、
朋友と交りて信ならざるか、
習わざるを伝うるか。

子曰く、
子曰、
千乘の国を道むるに、
道千乘之國、
事を敬して信じ、
敬事而
用を節して人を愛し、
信、節用而愛人、
民を使うに時を以てす。
使民以時。

子曰く、
子曰、

弟子入りては則ち孝、
弟子入則孝、

出でては則ち弟、
出則弟、

謹しみて信、
謹而信、

汎く衆を愛して仁に親しみ、
汎愛衆而親仁、

行うて余力
行有

あらば、
餘力、

則ち以て文を学べ。
則以學文。

子夏曰く、
子夏曰、賢賢易色、事父母
賢を賢として色に易え、父母に事えて
能竭其力、事君能致其身、
能くその力を尽くし、君に事えて能くその身を致し、
與朋友交、言而有信、雖曰
朋友と交わり、言いて信あらば、未だ学ばずと
未學、吾必謂之學矣。
曰うと雖も、吾は必ずこれを学びたりと謂わん。

子曰く、
子曰、君子不重則不威。學則不固。主忠信、無友不如己者。過則勿憚改。

君子は重からざれば則ち威あらず。
学べば則ち固ならず。
忠信を主とし、
己に如かざる者を友とすること
過ちては則ち改むるに憚かること勿かれ。
なかれ。

曾子曰く、
曾子曰、

終りを慎しみ遠きを追えば、
愼終追遠、

民の徳厚きに帰す。
民徳歸厚矣。

子禽、子貢に問うて曰く、

子禽問於子貢曰、夫子至於是邦也、必聞其政。求之與。

夫子はこの邦に至るや、これを求むるか。

必ずその政を聞く。

抑與之與。子貢曰、夫子温良恭倹譲、以得之。夫子之求之也、其諸異乎人之求之與。

そもそもこれを与うるかと。

子貢曰く、夫子は温良恭倹譲、以てこれを得たり。夫子のこれを求むるや、それこれ人のこれを求むるに異なるか。

子曰く、
子曰、
父在せば、
父在、
其の志を観る。
観其志。
父没すれば、
父没、
その行いを観る。
観其行。
三年父の道を改むることなきは、
三年無改於父之道、
孝と謂うべし。
可謂孝矣。

有子曰、
有子曰、禮之用和爲貴。先王之道斯爲美。小大由之。有所不行。知和而和、不以禮節之、亦不可行也。

有子曰く、
礼はこれ和を用て貴しとなす。先王の道もこれを美となす。小大これによる。行われざる所あり。和を知りて和し、礼を以てこれを節せざれば、また行うべからざるなり。

有子曰く、
有子曰、信近於義、言可復也。
信義に近づけば、言復むべきなり。
恭礼に近づけば、恥辱に遠ざかるなり。
恭近於禮、遠恥辱也。因不失
ざれば、因ることその親を失わ
また宗とすべきなり。
其親、亦可宗也。

子曰く、
子曰、君子食無求飽、居無求安。
君子は食飽くを求むることなく、居安きを求むることなし。
敏於事、而愼於言、就有道而正焉。可謂好學也已。
事に敏にして、言に愼しみ、有道に就いて正す。学を好むと謂うべきのみ。

子貢曰く、
子貢曰、貧而無諂、富而無
貧にして諂うなく、富みて驕るなきは何如
と。
驕如何。子曰、可也。未若貧
子曰く、可なり。未だ貧にして楽しみ、
而樂、富而好禮者也。子貢曰、
富みて礼を好む者には若かざるなりと。子貢曰く、
詩云、如切如磋、如琢如磨。
詩に云う、切するが如く磋するが如く、琢するが如く磨するが如しと。
其斯之謂與。子曰、賜也、
それこれをこれ謂うかと。子曰く、賜や、
始可與言詩已矣。告諸往而知
始めて与に詩を言うべきのみ。諸に往を告げて来を知るものなりと。
來者。

子曰く、
人を知らざるを患う。

子曰、不患人之不己知、患不知人也。

人の己を知らざるを患えず、

子曰く、学びて時にこれを習う、また説ばしからずや。朋あり、遠方より来たる、また楽しからずや。人知らずして慍らず、また君子ならずや。

表示

次頁

有子曰く、その人と為りや孝弟にして、上を犯すことを好む者は鮮し。上を犯すことを好まずして、乱を作すことを好む者は、未だこれあらざるなり。君子は本を務む。本立ちて道生ず。孝弟なる者は、それ仁の本なるか。

子曰く、巧言令色、鮮し仁。

曾子曰く、吾日に三たび吾が身を省みる。人のために謀りて忠ならざるか、朋友と交りて信ならざるか、習わざるを伝うるか。

表示

次頁

前頁

子曰く、千乗の国を道むるに、事を敬して信じ、用を節して人を愛し、民を使うに時を以てす。

子曰く、弟子入りては則ち孝、出でては則ち弟、謹しみて信、汎く衆を愛して仁に親しみ、行うて余力あらば、則ち以て文を学べ。

子夏曰く、賢を賢として色に易え、父母に事えて能くその力を尽くし、君に事えて能く其の身を致し、朋友と交わり、言いて信あらば、未だ学ばずと曰うと雖も、吾は必ずこれを学びたりと謂わん。

表示

前頁

次頁

子曰く、君子は重からざれば則ち威あらず。学べば則ち固ならず。忠信を主とし、己に如かざる者を友とすることなかれ。過ちては則ち改むるに憚かること勿かれ。

表示

次頁

前頁

曾子曰く、終りを慎しみ遠きを追えば、民の徳厚きに帰す。

子禽、子貢に問うて曰く、夫子はこの邦に至るや、必ずその政を聞く。これを求むるか。そもそもこれを与うるかと。子貢曰く、夫子は温良恭倹譲、以てこれを得たり。夫子のこれを求むるや、それこれ人のこれを求むるに異なるか。

子曰く、父在せば、その志を観る。父没すれば、その行を観る。三年父の道を改むることなきは、孝と謂うべし。

有子曰く、礼はこれ和を用て貴しとなす。先王の道もこれを美となす。小大これによる。行われざる所あり。和を知りて和し、礼を以てこれを節せざれば、また行うべからざるなり。

有子曰く、信義に近づけば、言復むべきなり。恭礼に近づけば、恥辱に遠ざかるなり。因ることその親を失わざれば、また宗とすべきなり。

表示

次頁

前頁

子曰く、君子は食飽くを求むることなく、居安きを求むることなし。事に敏にして、言に慎しみ、有道に就いて正す。学を好むと謂うべきのみ。

表示

次頁

前頁

子貢曰く、貧にして諂うなく、富みて驕るなきは如何と。子曰く、可なり。未だ貧にして楽しみ、富みて礼を好む者には若かざるなりと。子貢曰く、詩に云う、切するが如く磋するが如く、琢するが如く磨するが如しと。それこれをこれ謂うかと。子曰く、賜や、始めて与に詩を言うべきのみ。諸に往を告げて来を知る者なりと。

次頁

子曰く、人の己を知らざるを患えず、人を知らざるを患うるなり。

孔子（先生）が言われた、

子曰く、学びて時にこれを習う、

学んで時々刻々これを何度も繰り返し復習する、

また説ばしからずや。

なんと喜ばしいことではないか。

朋あり、遠方より来たる、

友人が遠方より訪ねてくる、

また楽しからずや。

なんと楽しいことであろうか。

人知らずして慍らず、

人（世間）が（自分のことを）評価してくれなくても腹を立てない、

また君子ならずや。

なんと（これこそが）君子（紳士）ではないか。

有子が言われた、

有子曰く、

その人柄が父母と年長者によく仕える者で、

その人と為りや孝弟にして、

上位者（地位が上の者）を軽蔑侮辱することを好む者は

上を犯すことを好む者は鮮し。

少ない（ほとんどいない）。

上位者を軽蔑侮辱することを好まないのに、

上を犯すことを好まずして、

反乱を起こすことを好む者は、

乱を作すことを好む者は、

未だいない。

未だこれあらざるなり。

君子は根本のことに力を注ぐ。

根本が立てば（定まれば）君主に仕えて道生ず。

人に交わる道も自ずから生じる。

孝弟（父母と年長者によく仕えること）は、

それすなわち仁の本なるか。

仁を行う根本ではあるまいか。

孝弟なる者は、それ

子曰く、巧言令色、鮮し仁。

言葉を巧みに飾り、外面をよくみせようとする人には、仁は少ない（存在しない）。

曾子曰く、吾日に三たび吾が身を省みる。人のために謀りて忠ならざるか、朋友と交りて信ならざるか、習わざるを伝うるか。

私は日に何度も自分自身の行いを省みている。

人のために相談に乗って真心を十分に尽くさなかった所はなかったか。

友人との交際において己の言行に不誠実はなかったか。

自分が習熟していない（十分理解できていない）ことを人に伝えることはなかったか。

子曰く、千乗の国を道むるに、
諸侯の国を治めるには、
事を敬して信じ、用を節し
国の政事を慎重にして人民から信頼され、国の費用を節約して人民を愛しみ、
て人を愛し、民を使うに時を
人民を使役するのは妥当な時節にすることだ（農繁期であってはならない）。
以てす。

子曰く、弟子入りては則ち孝、出でては則ち弟、謹しみて信、汎く衆を愛して仁に親しみ、行うて余力あらば、則ち以て文を学べ。

若者よ家にいる時は父母、長上に孝行を尽くし、外に出れば悌順（年長者・目上に対して従順）、行いが慎重で誠実にして人を欺かず、広く大衆（世の人々）を愛して仁徳の君子に親しみ、以上のことを行ってまだ余力があれば、詩書を読み六芸（礼楽射御書数）を学べ。

子夏曰く、賢を賢として色に易え、父母に事えて能くその力を尽くし、君に事えて能く其の身を致し、朋友と交わり、言いて信あらば、未だ学ばずと曰うと雖も、吾は必ずこれを学びたりと謂わん。

賢徳の師を尊敬し好む事をあたかも女色を好む心を以てこれに換え、父母に仕えては全力を尽くして孝行し、君主に仕えてはよくその身を捧げて忠義を尽くし、友人との交際では、言葉が誠実にして信用があれば。この人が自らを謙遜して私は未だ学問した事はないと言ったとしても、私は断じてこの人はすでに十分学問の成就した人であるといいたい（宣言したい）。

次頁 前頁

子曰く、君子は重からざれば則ち威あらず。学べば則ち固ならず。忠信を主とし、己に如かざる者を友とすることなかれ。過ちては則ち改むるに憚かること勿かれ。

君子（君主）は重々しく（重厚さが）なくては、威厳がない（民に威厳を感じさせる事ができない）。

学びし所も堅固に守持することができない。

忠と信を心の主人公（第一）として、自分より劣る人物を友とするな。

過ちがあったならそれを改めることを躊躇してはならない（すぐに改めよ）。

曾子曰く、終りを慎しみ遠き（為政者が）父母親族の喪にあたりその礼を尽くし、先祖を手厚くお祭りすれば、を追えば、民の徳厚きに帰す。（それに影響されて）自然に民の徳も厚くなる。

子禽が子貢に問うて言った、
子禽、子貢に問うて曰く、夫
先生は何れの国に至りても、
子はこの邦に至るや、必ずそ
必ずその国の君主より
政事上の相談を受けられる。
の政を聞く。これを求むるか。
これは先生よりこれ（政事上の相談）求められたのか。
それとも先方（相手）からこれ（政事上の相談）を持ちかけられたのか。
そもそもこれを与うるかと。
先生は、温、良、恭、倹、譲の人柄であるから、
子貢曰く、夫子は温良恭倹
（各国の君主が皆敬信し、）それでそういうことになるのだ。
譲、以てこれを得たり。夫子
先生のこれ（政事上の相談）を求める方法といえば、
他人がこれ（政事上の相談）を
のこれを求むるや、それこれ
求める方法とは異なっているだろう。
人のこれを求むるに異なるか。

子曰く、父在せば、その志を観る。父没すれば、その行を観る。三年父の道を改むることなきは、孝と謂うべし。

父の在世にあっては、父のその志を観察し、父の生前の行動を観察する。父の死後は、父の死後、喪中の間は父の行いたる道を改めずにいるのは、孝行と言うべきである。

有子曰く、礼はこれ和を用て貴しとなす。先王の道もこれを美となす。小大これによる。行われざる所あり。和を知りて和し、礼を以てこれを節せざれば、また行うべからざるなり。

礼はその応用に際して人情の融合を旨とする和を加味することを貴しとする。

古代の聖王が天下を治めた道も礼と和の併用を以て善美とした。

小事も大事も厳正なる礼によってのみ処すならば、種々行うべきことに支障をきたす。

厳正なる礼で以て和を（限度を和が大切であると知り和にばかり重きをおき、越えないように）節しなければ、これまた行うべきことに支障をきたす。

有子曰く、信義に近づけば、言復むべきなり。恭礼に近づけば、恥辱に遠ざかるなり。因ることその親を失わざれば、また宗とすべきなり。

人との約束が義に近づいておれば、約言した所の約束を履行することができる。

恭が礼に近づいておれば、恥辱を受けることに遠ざかる。

たよるには（誰かを頼りにする場合）、親しむべき人を間違えなければ、その人を宗主とす（中心にやっていく）べきである。

子曰く、君子は食飽くを求むることなく、（君子は飽食を求めることなく、）居安きを求むることなし。（安楽な住居を求めることもない。）事に敏にして、（なすべき事は敏捷に処理して、）言に慎しみ、（しかもその上、言葉を慎み（軽率に言葉を発せず）、）有道に就いて正す。（有徳の人に近づき親しんで善悪を正してもらう。）学を好むと謂うべきのみ。（そうであって始めて）学を好むというべきである。

子貢曰く、貧にして諂うなく、富みて驕るなきは如何と。子曰く、可なり。未だ貧にして楽しみ、富みて礼を好む者には若かざるなりと。子貢曰く、詩に云う、切するが如く磋するが如く、琢するが如く磨するが如しと。それこれをこれ謂うかと。子曰く、賜や、始めて与に詩を言うべきのみ。諸に往を告げて来を知る者なりと。

貧乏であっても態度と言葉が卑屈でなく、富裕なる時も態度と言葉が傲慢無礼ではないというのはいかがでしょか。

まあよかろう。

（だが）貧乏であっても（道を）楽しみ、富裕なる時であっても礼を好む者には及ばない。

（象牙を加工する時）既に切って形をなしたものをさらに研ぐように、詩経の詩に、

（玉を加工する時）既に琢って形をなしたものをさらに磨くようにと。

それは、このこと（学問の極まりなき事）をいうのでしょうね。

賜よ、お前は始めてともに詩について語るに足る人物と言うべきだ。

（たとえて言えば）過去のことを話して聞かせると未来のことまで知る（一を告げて二を知る）者だな。

子曰く、人の己を知らざるを患えず、人を知らざるを患うるなり。

人が自分を認めてくれないことを心配せず、自分が人を認められないことを心配することだ。

電子書籍 論語 体験版

制作・編集 : 有限会社 DCP
広島市西区横川新町 6-6-1906

(C) 2023 DCP Corporation. All Right Reserved.